V　溝口遺跡１号箱式石棺墓出土の古墳時代人骨

＊分部 哲秋、佐伯 和信、岡本 圭史

はじめに

溝口遺跡は長崎県諫早市高来町字馬渡に所在し、2005（平成17）年６月周知遺跡区域外の耕作地から石棺発見の報がもたらされたことに伴い2005年９月20日から同年10月28日まで諫早市教育委員会により学術発掘調査が実施された。今回の発掘調査では、溝状遺構、ピット、集石遺構の他に、弥生時代後期後葉～古墳時代前期に所属する３基の箱式石棺墓が発掘されたが、うち１基（１号箱式石棺墓）より１体の人骨が検出された。長崎県においては離島を含む東シナ海沿岸地域での弥生時代人骨の出土は多いが、古墳時代以降の人骨の出土は稀であり、弥生時代以後の骨格形質の変化についてはよく分かっていないのが実情である。

本人骨の遺存状態は必ずしもよくはないが、性別及び年齢の同定並びに四肢骨の一部の計測が可能であったので、今後の研究のために形質人類学的所見について記録を残しておきたい。

資料及び方法

溝口遺跡１号箱式石棺墓から出土した人骨は、別項の考古学的所見に記載されているように古墳時代前期に属すものと考えられている。人骨の遺存状態は、図１及び図２に示しているように頭部から上肢骨から下肢骨まで全身的に遺存していたが、腐朽のためにもろく、骨種が分かるものでも骨表面の剥落があり計測に耐えられるものは限られた。

図１の人骨実測図において発掘時に確認された人骨の出土状態は、下顎骨の位置が頭蓋本体よりやや離れていることと左側大腿骨の中央から遠位部が何らかの原因で移動している他は正常に近いものと考えられ、埋葬姿勢は上肢、下肢ともに伸展葬と判断される。

人骨の性別は、頭蓋の乳様突起、四肢骨の形状及び大きさにより同定した。また、年齢に関しては、頭蓋の縫合の閉鎖の度合いと歯の咬耗の程度を参考に推定を行った。

残存した骨の計測は、MARTIN－SALLER（1957）の方法で行い、一部において行えた頭蓋形態小変異の観察は、百々（1974）の基準に従って出現の有無を判定した。以上は分部が担当し、歯種の分類と藤田（1949）の方法に従った歯の計測は、佐伯が担当した。

所　　見

本人骨の整理・接合、復元後の遺存状態は本文の図２に示した。また、歯牙、四肢骨の計測可能部分の値は附表１～４に、残存部の写真はＰＬ．として文末に一括して掲げた。

１．人骨所見

本人骨は、頭蓋および四肢では右側大腿骨の一部が遺存し、躯幹骨は全く残存していない。

＊　長崎大学　大学院医歯薬学総合研究科　生命医科学講座

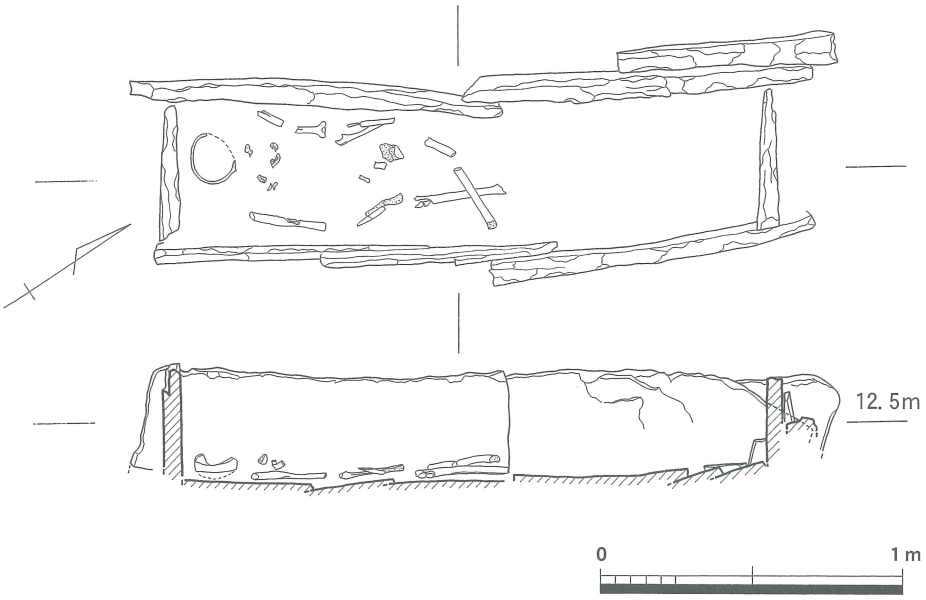


図１　人骨出土状況実測図

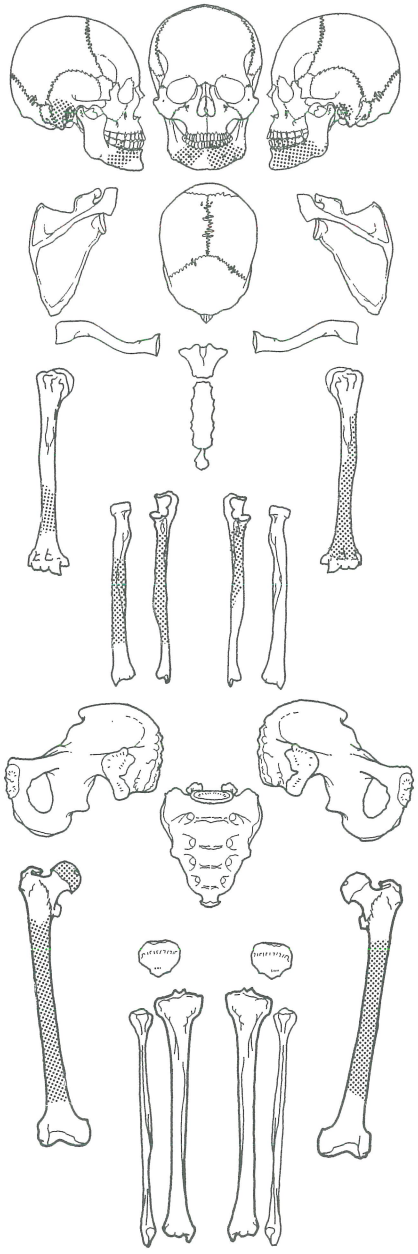


図２　人骨の残存部（アミ掛け部）

(1)　頭蓋

脳頭蓋では、右・左側頭骨の側頭鱗を除く部と小頭蓋骨片が遺存している。右側頭骨の乳様突起は非常に小さい。頭蓋形態小変異の観察では、鼓室骨裂孔（＞１㎜）は右；有、左；観察不能、鼓室骨裂孔（＞Pinhole）は右；有、左；観察不能、外耳道骨腫は右；無、左；観察不能である。顔面頭蓋では下顎骨の下顎体及び上下両顎の歯９本が遺存している。表１に示すように咬耗の程度はBrocaの１～２度と判定され、咬耗は弱い。

咬耗度		1	2	2		2									1	
	／	M_2	M_1	P_2	／	C	／	／	／	／	／	／	／	／	M_2	／
	／	／	M_1	○	○	○	○	○	／	○	○	P_1	P_2	M_1	●	／
咬耗度			2									2	1-2	2		

【○：歯槽開存、●：歯槽閉鎖、／：歯槽欠損・歯不明】

表１　溝口１号箱式石棺墓人骨の歯式（女性、壮年）

(2)　四肢骨

発掘後、形を保ち骨部位が分かるものは右・左上腕骨、右橈骨、右・左尺骨、右・左大腿骨の骨体である。これらは筋付着部の隆起は弱く、全体的に華奢である。

(3)　性別・年齢

乳様突起の大きさ、四肢骨の筋付着部の状態等から本人骨は女性骨と推定される。また、年齢については、歯の咬耗が弱いことから壮年（20～30歳代）と判断される。

2．計測値からみた形態的特徴

本人骨について頭蓋からの計測値は得られず、主要な四肢骨についての計測値比較を表２及び３に示す。比較資料としては縄文人の継続と考えられている佐賀県呼子町大友遺跡出土弥生人、大陸からの渡来ないしその子孫と推測されている北部九州弥生人（主として福岡県出土）と山口弥生人（主として土井ヶ浜遺跡出土）及び西日本古墳人の計測平均値（女性）を掲げた。

溝口１号箱式石棺墓人骨の上腕骨は、骨体最小周53㎜（左）が縄文系の大友弥生人、渡来系の北部九州及び山口弥生人よりもかなり小さく、西日本古墳人の平均値に近い。骨体は両系の弥生人よりは細く華奢である。次いで、大腿骨の中央周は79㎜（左）で、上腕骨と同様に両系の弥生人より小さく、西日本古墳人よりもやや大きい値を示して骨体は細い。また、骨体中央横径に対する矢状径の比を表す骨体中央断面示数は96.2（左）で、示数値が100を超えて大腿後面粗線の発達のよい縄文系の大友弥生人とは対照的である。溝口１号箱式石棺墓人骨の大腿骨の骨体中央部断面形は横広であり、縄文系の形態は示していない。以上、溝口１号箱式石棺墓人骨の四肢骨は上肢、下肢ともに細くて華奢であり、１体ではあるが西日本の古墳人と共通した特徴を示した。

	溝口２号箱式石棺墓（古墳）		大友（弥生）		北部九州（弥生）		山口（弥生）		西日本（古墳）	
	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
7．骨体最小周	1	53	19	57.6	47	56.9	49	56.0	5	51.2

表２　上腕骨計測値比較（女性、左、㎜）

	溝口２号箱式石棺墓（古墳）		大友（弥生）		北部九州（弥生）		山口（弥生）		西日本（古墳）	
	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
6．骨体中央矢状径	1	25	30	25.5	112	25.7	50	25.5	23	24.5
7．骨体中央横径	1	26	30	25.2	112	26.3	50	26.2	24	24.7
8．骨体中央周	1	79	29	80.4	111	81.5	50	80.9	23	78.1
6／7骨体中央断面示数	1	96.2	31	102.1	112	98.3	50	97.5	23	100.0

表３　大腿骨計測値比較（女性、左、㎜）

まとめ

溝口遺跡１号箱式石棺墓から出土した１体の古墳時代人骨は、観察所見より壮年の女性と判断される。四肢骨の計測成績を九州から山口県の弥生人及び西日本古墳人と比較した結果、上肢、下肢ともに華奢であり、西日本の古墳人と共通した傾向を示した。

参考文献〔紙面の都合から長崎大学の関係した業績の参考文献を省略しました〕

１）Dodo Y.（1974）；Non-metrical cranial traits in the Hokkaido Ainu and the northern Japanese of recent times. J. Anthrop. Soc. Nippon 82：31-51.

２）藤田恒太郎（1949）；歯の計測基準について、人類学雑誌　61：27-32.

３）池田次郎（1993）；２時代的特徴、古墳文化の研究１：２古墳人、雄山閣、東京：33-47.

４）Martin, R. and Saller, K.（1957）；Lehrbuch der Anthropologie, Bd.T.Gustav Fischer Verlag Stuttgart.

５）中橋孝博、永井昌文（1989）；形質、弥生文化の研究１：３　弥生人、雄山閣、東京：23-51.

性別 右左別			溝口 1号石棺 女性 右側	左側
頬舌径	上顎	I 1	−	−
		I 2	−	−
		C	7.98	−
		P 1	−	−
		P 2	8.91	−
		M 1	11.35	−
		M 2	11.11	11.07
		M 3	−	−
	下顎	I 1	−	−
		I 2	−	−
		C	−	−
		P 1	−	7.62
		P 2	−	8.28
		M 1	10.64	10.76
		M 2	−	−
		M 3	−	−
近遠心径	上顎	I 1	−	−
		I 2	−	−
		C	7.67	−
		P 1	−	−
		P 2	6.72	−
		M 1	10.17	−
		M 2	10.01	9.62
		M 3	−	−
	下顎	I 1	−	−
		I 2	−	−
		C	−	−
		P 1	−	6.94
		P 2	−	7.04
		M 1	11.59	11.50
		M 2	−	−
		M 3	−	−

注：ブランクは、歯が残存していない

附表 1　歯冠計測値（mm）

Martin's No.		性別	溝口 1号石棺 女性
1	上腕骨最大長	(右)	−
		(左)	−
2	上腕骨全長	(右)	−
		(左)	−
5	中央最大径	(右)	−
		(左)	−
6	中央最小径	(右)	−
		(左)	−
7	骨体最小周	(右)	−
		(左)	53
7 a	中央周	(右)	−
		(左)	−
6／5	骨体断面示数	(右)	−
		(左)	−

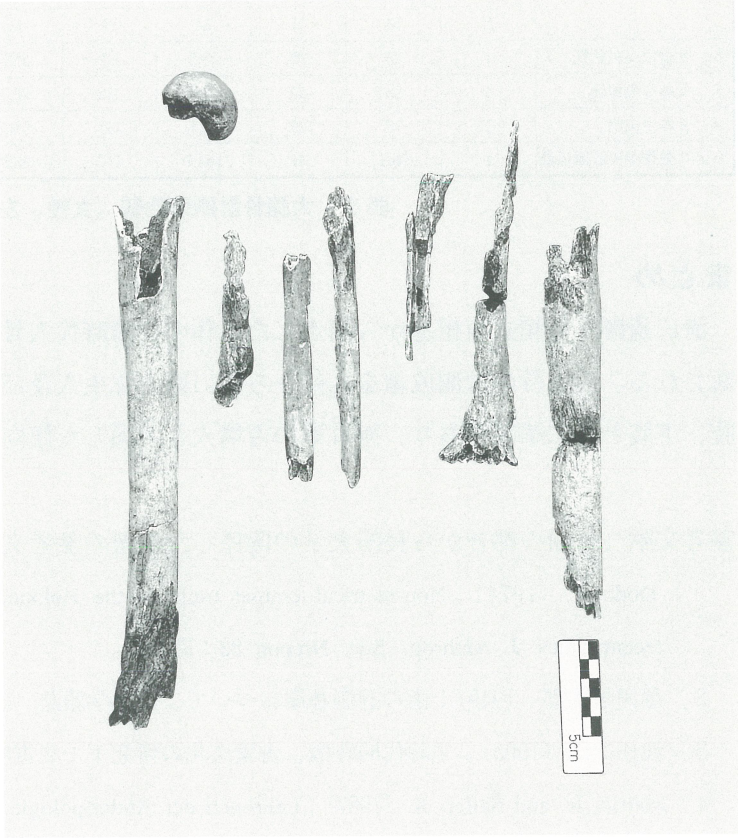
附表 2　上腕骨計測値（mm）

Martin's No.		性別	溝口 1号石棺 女性
1	最大長	(右)	−
		(左)	−
2	機能長	(右)	−
		(左)	−
3	最小周	(右)	35
		(左)	−
4	骨体横径	(右)	16
		(左)	−
4 a	骨体中央横径	(右)	16
		(左)	−
5	骨体矢状径	(右)	9
		(左)	−
5 a	骨体中央矢状径	(右)	9
		(左)	−
5（5）	骨体中央周	(右)	39
		(左)	−
5／4	骨体断面示数	(右)	56.3
		(左)	−
5 a／4 a	骨体中央断面示数	(右)	56.3
		(左)	−

附表 3　橈骨計測値（mm）

Martin's No.		性別	溝口 1号石棺 女性
1	最大長	(右)	−
		(左)	−
2	自然位全長	(右)	−
		(左)	−
6	骨体中央矢状径	(右)	24
		(左)	25
7	骨体中央横径	(右)	26
		(左)	26
8	骨体中央周	(右)	78
		(左)	79
9	骨体上横径	(右)	29
		(左)	29
9'	骨体上最大径	(右)	29
		(左)	29
10	骨体上矢状径	(右)	22
		(左)	22
10'	骨体上最小径	(右)	21
		(左)	21
6／7	骨体中央断面示数	(右)	92.3
		(左)	96.2
10／9	上骨体断面示数	(右)	75.9
		(左)	75.9
10'／9'	上骨体断面示数	(右)	72.4
		(左)	72.4

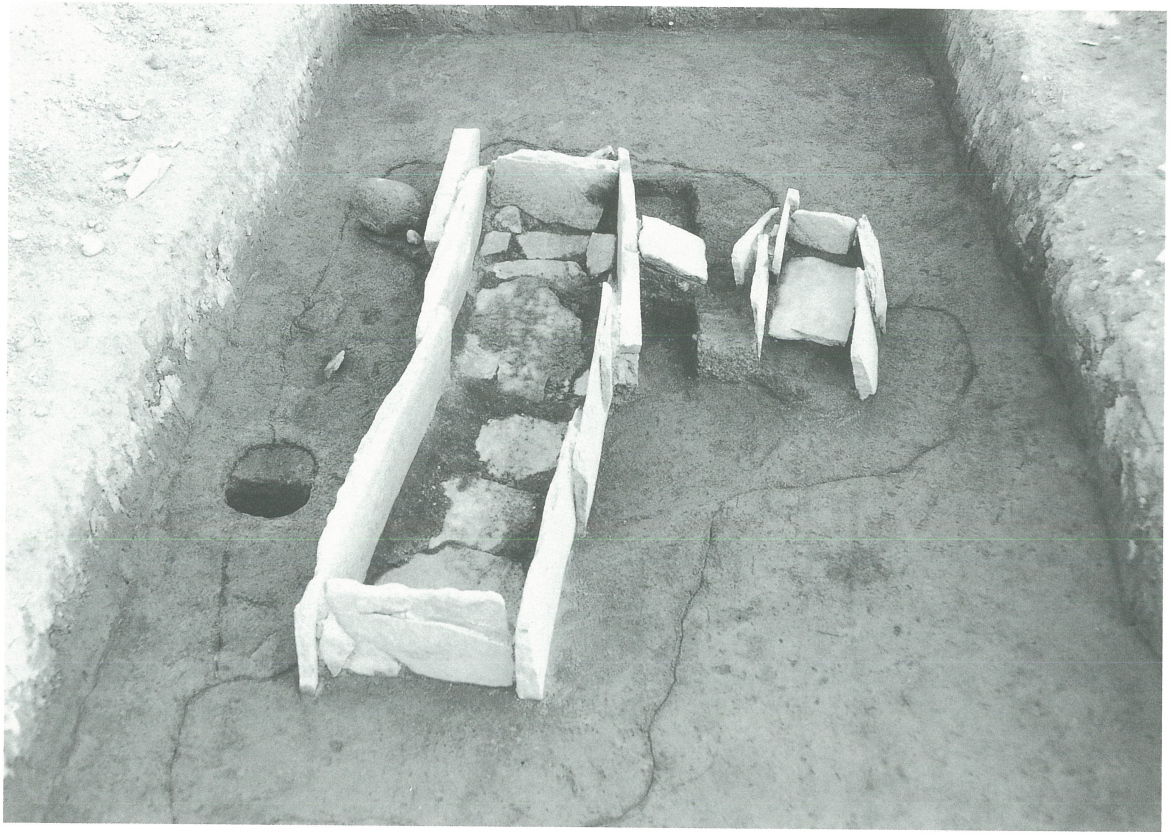
附表 4　大腿骨計測値（mm）



ＰＬ．１号石棺出土人骨（女性、壮年）

図　　版

遺跡近景（左は国道207号線）



左：１号箱式石棺墓　右：２号箱式石棺墓

左：1号箱式石棺墓　右：2号箱式石棺墓

手前：1号箱式石棺墓　奥：2号箱式石棺墓

左：1号箱式石棺墓　右：2号箱式石棺墓

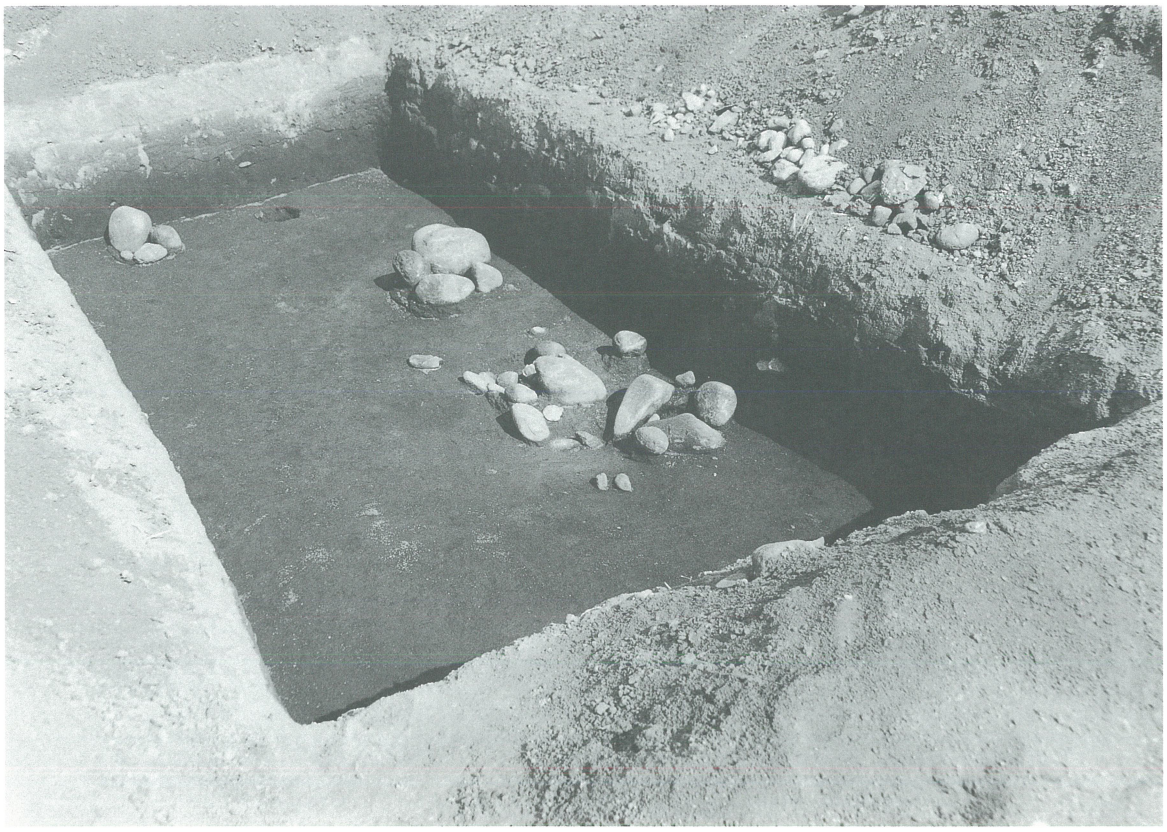
3号箱式石棺墓

石蓋土壙墓（蓋石）

石蓋土壙墓（土壙）

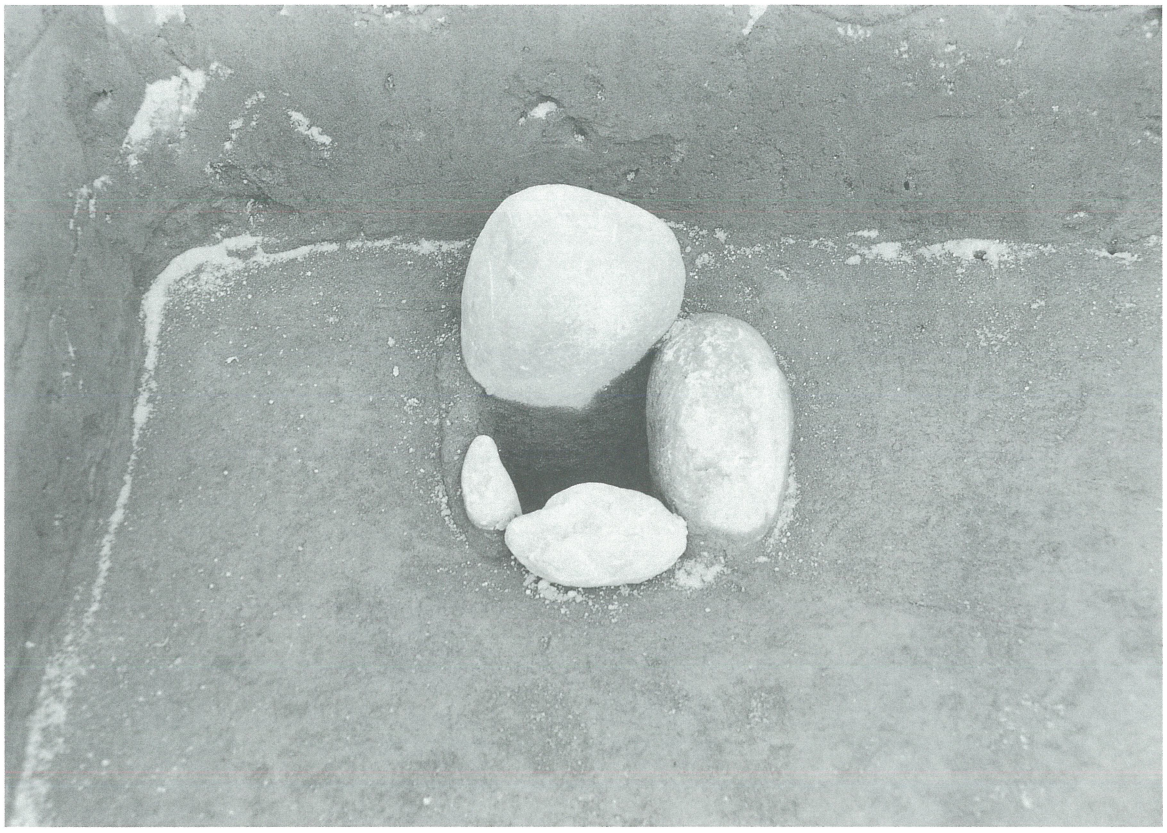
左：石蓋土壙墓　右：３号箱式石棺墓

溝状遺構①とピット



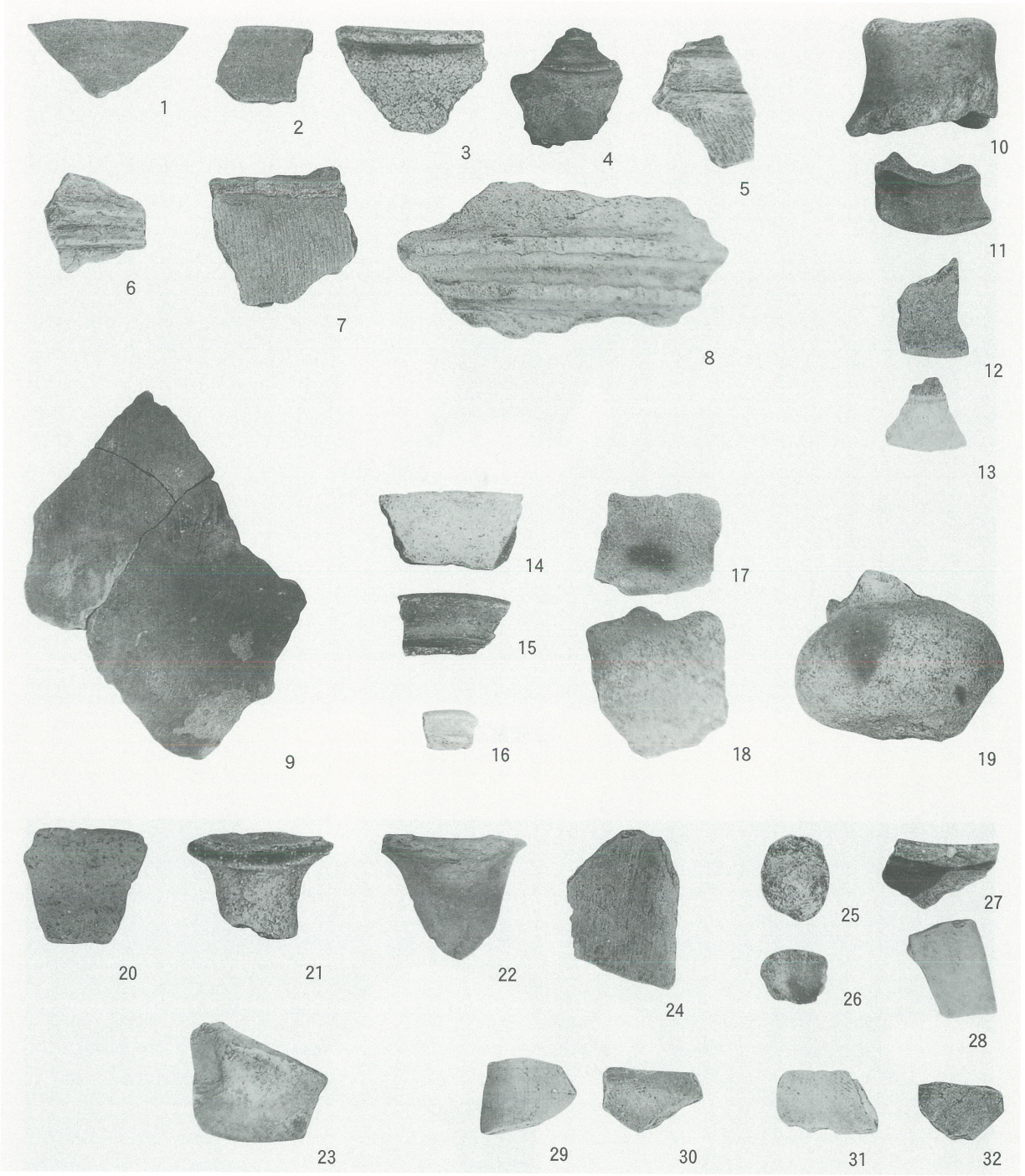
集石遺構（左から２号、１号、３号）

１号集石

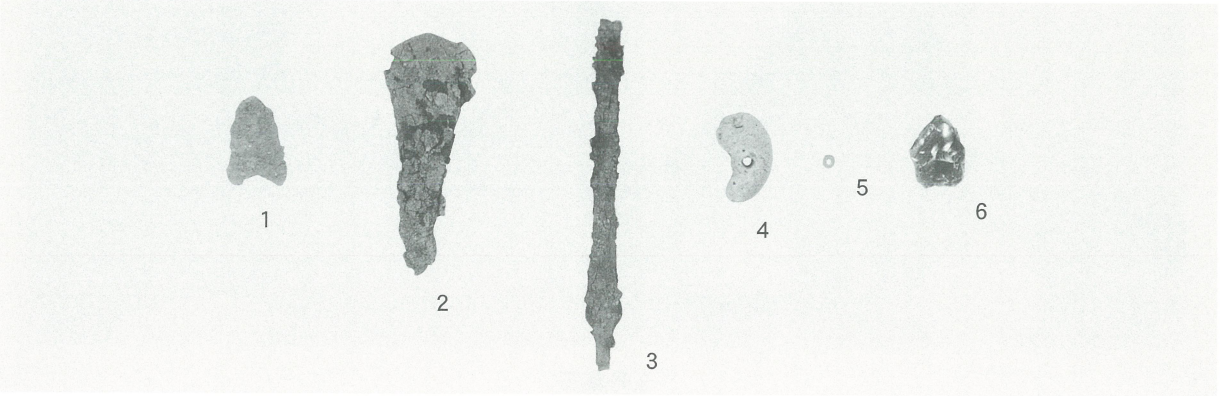


2 号集石

3 号集石



出土遺物（土器）



出土遺物（鉄器など）

③　滑川遺跡（なめりかわいせき）

例　　言

1．滑川遺跡は諫早市貝津町782に所在する。

2．調査期間は平成18年２月20日～３月20日

　　平成18年５月22日～31日である。

3．調査面積は47㎡である。

4．調査及び整理作業にかかる図面・写真類は諫早市教育委員会が管理し、諫早市郷土館で保管している。

5．本書に使用したレベルは海抜高であり、方位は磁北である。

6．発掘調査は諫早市教育委員会が実施した。

教 育 長　　峰松　終止

教育次長　　平野　　博

文化課長　　松本　玉記

課長補佐　　川内　順史

参 事 補　　秀島　貞康（現在、参事）

事務職員　　川瀬　雄一（調査・整理作業担当、現在主任）

7．本書の執筆・編集は川瀬が行った。

目　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境……49
第１節　地理的環境……49
第２節　歴史的環境……49
Ⅱ　調査の経過……50
第１節　調査に至る経緯……50
第２節　調査の方法……50
第３節　層位……50
Ⅲ　調査の記録……54
第１節　遺構……54
１．１号箱式石棺墓……54
２．２号箱式石棺墓……54
３．３号箱式石棺墓……54
４．４号箱式石棺墓……57
５．１号甕棺墓……59
６．２号甕棺墓……60
第２節　遺物……61
Ⅳ　まとめ……63

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡分布図（Ｓ－１/25,000）……51
第２図　調査位置図（Ｓ－１/5,000）……51
第３図　土層図（Ｓ－１/40）……52
第４図　遺構配置図（Ｓ－１/250）……53
第５図　１号箱式石棺墓実測図（Ｓ－１/20）……55
第６図　２号箱式石棺墓実測図（Ｓ－１/20）……56
第７図　３号箱式石棺墓実測図（Ｓ－１/20）……57
第８図　４号箱式石棺墓実測図（Ｓ－１/20）……58
第９図　１号甕棺墓実測図（Ｓ－１/20）……59
第10図　２号甕棺墓実測図（Ｓ－１/20）……60
第11図　土器実測図（Ｓ－１/６・１/３）……62

表　目　次

第１表　周辺遺跡地名表……51
第２表　出土遺構一覧表……54
第３表　トレンチ別遺物一覧表……61
第４表　出土遺物観察表……61

図　版　目　次

図版１　遺跡遠景（上段）・遺跡近景（下段）……67
図版２　１号箱式石棺墓（上・下段）……68
図版３　２号箱式石棺墓（上段）、３号箱式石棺墓（下段）……69
図版４　４号箱式石棺墓（上・下段）……70
図版５　１号甕棺墓（上・下段）……71
図版６　２号甕棺墓（上・下段）……72
図版７　出土遺物①……73
図版８　出土遺物②……74

Ⅰ　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

滑川遺跡は、東西に走るＪＲ長崎本線と国道34号線、南北に走る長崎自動車道（高速道路）とが交差する箇所にある（第１・２図、図版１）。国道34号線は、長崎方面あるいは大村方面へと向かう車両がひっきりなしに往来しており、終日通交量が絶えることがない。国道の南側に分譲住宅地や学校などが立ち並ぶのとは対照的に、遺跡の所在する国道の北側は工場が数棟あるほかは、人家もまばらで、水田や畑が広がるという閑静な環境である。しかし、遺跡の北側の久山港では現在大規模な埋め立て工事が行われており、将来的にはその様相も一変するものと思われる。

遺跡周辺の地形は山地、丘陵、平地に大別される。山地は、遺跡の南側にそびえる井樋ノ尾岳（406.8m）、八天岳（296.7m）などの溶岩円頂丘群で、これらは安山岩からなり、長崎火山の中央部をなしている。丘陵は、古第三紀砂岩を中心とした堆積岩による地形で、浸食谷が顕著で小さく分断されている。北へ高度を逓減していくと、大村湾南岸に開けた平地へとつながる。ここでは氾濫原や海岸平野に加え、海岸段丘地形も見られる。

本遺跡は大村湾の南奥部に位置する標高７ｍほどの独立丘陵の東側に立地し、丘陵のすぐ西側には久山川が、やや東側には西大川が大村湾に注いでいる。丘陵は一辺が20ｍほどの三角形状を呈しており、標高1.3ｍ前後を測る丘陵の周囲には畑と水田が広がっている。この独立丘陵は先述した両河川の浸食により形成されたものである。

本遺跡は弥生時代の石棺が存在する箇所として知られているが、過去の発掘調査例としては、平成11年度に久山川の河川改修に伴う範囲確認調査を実施したのみである（本報告書87Ｐ）。

第２節　歴史的環境（第１図）

周辺遺跡の立地は、滑川遺跡の南側にある丘陵の標高40ｍ以下に集中する。標高10～20ｍには雀ノ倉遺跡、牛込Ａ・Ｂ遺跡が、標高20～30ｍには西輪久道遺跡、鷹野遺跡、平遺跡が立地している。これらはいずれも西大川の流域にある旧石器～縄文時代の複合遺跡である。

弥生時代の遺跡としては、貝津横島Ａ遺跡、化屋大島遺跡がある（現在は消滅）。

貝津横島Ａ遺跡では、長さ５尺、幅３尺の箱式石棺墓11基、長さ３尺、幅１尺の小形の箱式石棺墓３基が発見されたという（註１）。

化屋大島遺跡は本遺跡と同じく大村湾の南奥部に位置する。昭和35年に発見され、昭和45年の分布調査で10基ほどの石棺が確認された。その後昭和48年に宅地造成に伴い調査が行われた。調査では、弥生時代前期末から中期初頭にかけての箱式石棺墓７基が確認された。石棺の法量は長軸１ｍ前後、短軸40㎝前後と均一している（註２）。本遺跡と立地や時期が共通している遺跡である。

このほかには、築城者、時期などの詳細については不明であるが、本丸、馬出と見られる遺

構が残る久山城跡、縄文時代前期や弥生時代中期の土器などが出土した貝津横島Ｂ遺跡（本報告書109Ｐ）、同じく縄文時代前期の低湿地遺跡である浜田遺跡などがある。

註１　諫早市役所　1955『諫早市史　第１巻』

註２　井上和夫　1974『化屋大島遺跡』多良見町文化財調査報告書第２集　多良見町教育委員会

Ⅱ　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

平成18年１月25日、今回調査地の耕作者より「耕作中に石棺が出土した。中には壺が入っていた。」との通報があった。現地に急行し、確認したところ、箱式石棺墓１基（１号箱式石棺墓、第５図）が出土しており、出土した壺形土器（第11図４）は弥生時代中期初頭のものと判断された。当地ではこれまでも、板状石が出土していたとのことで、これらは石棺の部材であると考えられる。従来より、滑川遺跡では箱式石棺墓の存在が想定されていたが、詳細な時期、基数などについては不明瞭であったため、今回の発見を機に、土地所有者、耕作者の承諾を得て、範囲確認のための調査を実施することとなった。

第２節　調査の方法

調査は、石棺の時期・基数の確認を目的として行った。耕作に影響がない地点で任意にトレンチを設定して調査を行った。設定したトレンチは合計９箇所である。

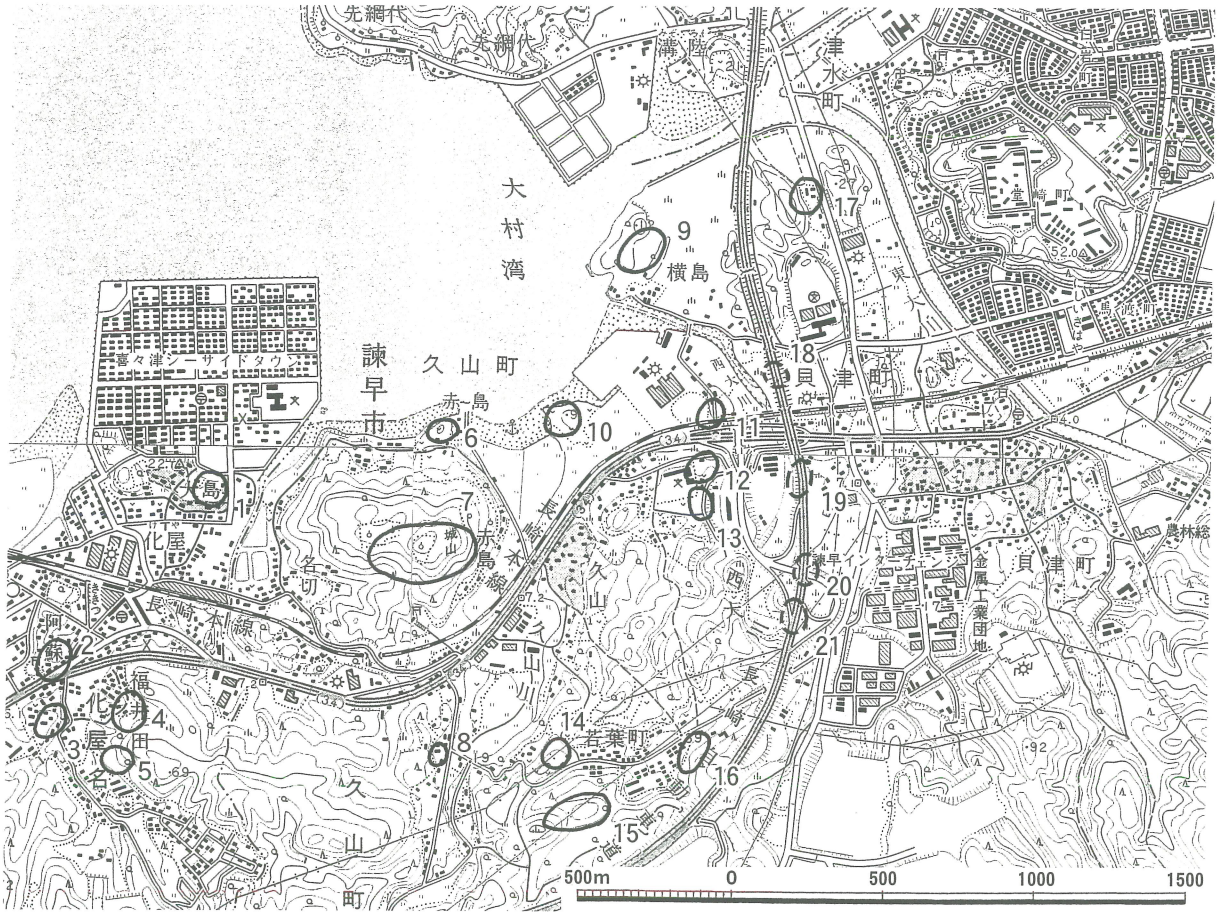
出土した遺構については、箱式石棺墓４基については現状保存が見込まれることから石材の抜き取りなどは行わず、調査終了後に埋め戻しを行った。甕棺墓については、破片ごとに番号を付けて取り上げを行った。

遺物の取り上げについては層位ごとに行った。

遺構及び土層図は１／10で作図、必要に応じて１／20で行った。遺構の位置関係についての平板測量は１／100で行った。遺構の検出状況などの記録写真は、35㎜の白黒・カラーフィルムで行った。

第３節　層　　位（第３図）

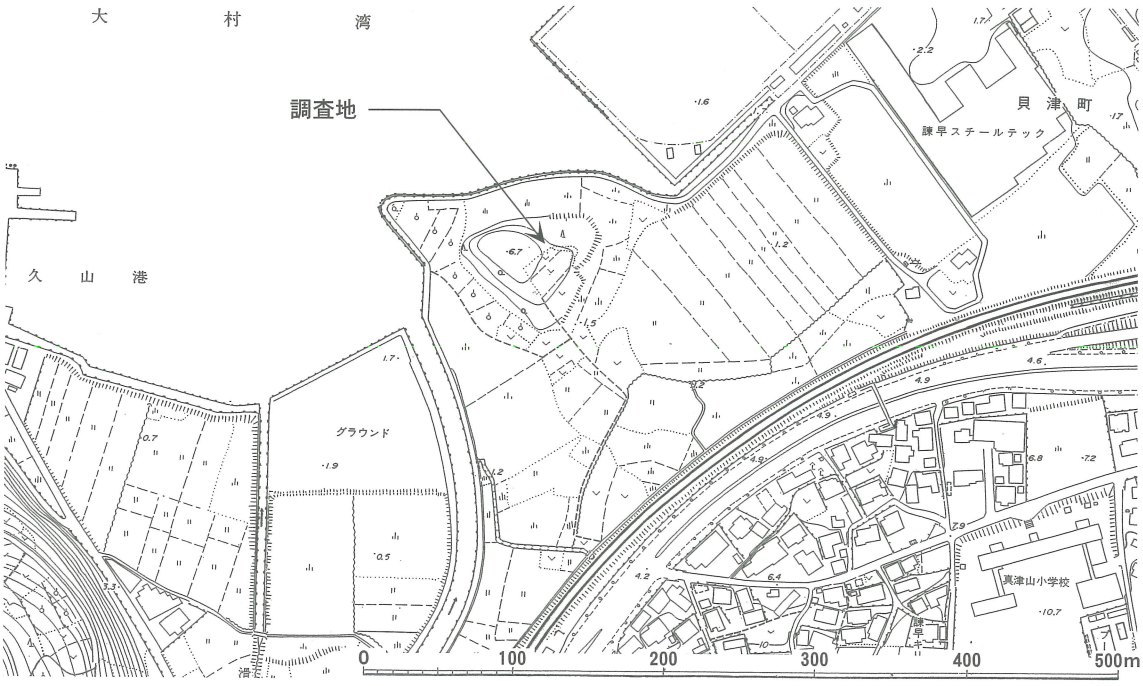
基本的な層位は、１層－耕作土、２層－赤褐色粘質土、３層－安山岩風化礫層（地山）である。遺構・遺物は２層にある。今回設定した９つのトレンチのうち、南端にある６・７Ｔでは２層が見られない。



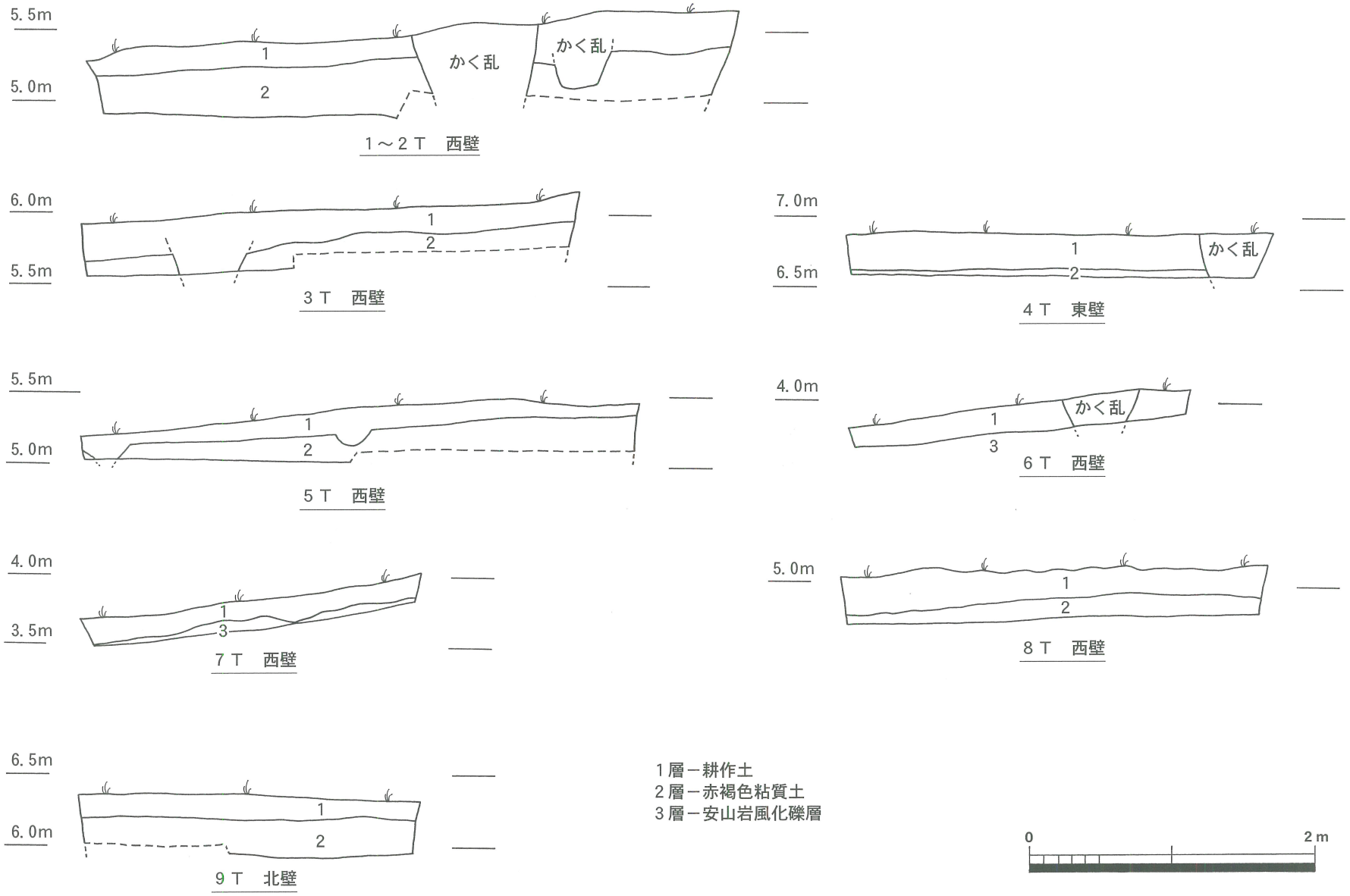
第１図　周辺遺跡分布図（Ｓ－1/25,000）

番号	名　称	種　別	立　地	時　代
1	化屋Ｂ遺跡	遺物包含地	丘　陵	旧石器・縄文
2	上阿蘇遺跡	墳墓	台　地	弥生
3	阿蘇前遺跡	遺物包含地	平　地	縄文
4	野副遺跡	遺物包含地	丘　陵	旧石器・縄文
5	合戦場遺跡	遺物包含地	山　裾	旧石器・縄文
6	赤島遺跡	遺物包含地	丘　陵	縄文
7	久山城跡	城跡	丘　陵	中世
8	久山古墳	古墳	丘　陵	古墳
9	貝津横島Ｂ遺跡	遺物包含地	丘　陵	縄文
10	滑川遺跡	墳墓・遺物包含地	丘　陵	縄文～古墳
11	貝津横島Ａ遺跡	墳墓	丘　陵	弥生・古墳
12	東大久保遺跡	遺物包含地	丘　陵	旧石器・縄文
13	柿崎遺跡	遺物包含地	丘　陵	旧石器・縄文
14	笹原遺跡	遺物包含地	丘　陵	縄文
15	長牟田遺跡	遺物包含地	丘　陵	縄文・中世
16	西輪久道遺跡	遺物包含地	丘　陵	縄文・中世
17	西佐竹遺跡	遺物包含地	丘　陵	縄文
18	浜田遺跡	遺物包含地	平　野	旧石器・縄文
19	雀の倉遺跡	遺物包含地	丘　陵	旧石器・縄文
20	牛込Ａ遺跡	遺物包含地	丘　陵	旧石器・縄文
21	岩下遺跡	遺物包含地	丘　陵	縄文・近世

第１表　周辺遺跡地名表



第２図　調査位置図（Ｓ－1/5,000）


5.5m
5.0m
1
2
かく乱
かく乱
1～2Ｔ　西壁
6.0m
5.5m
1
2
3Ｔ　西壁
7.0m
6.5m
1
2
かく乱
4Ｔ　東壁
5.5m
5.0m
1
2
5Ｔ　西壁
4.0m
1
3
かく乱
6Ｔ　西壁
4.0m
3.5m
1
3
7Ｔ　西壁
5.0m
1
2
8Ｔ　西壁
6.5m
6.0m
1
2
9Ｔ　北壁
1層－耕作土
2層－赤褐色粘質土
3層－安山岩風化礫層
0
2m

第３図　土層図（Ｓ－1/40）

第 4 図　遺構配置図（S ー1/250）

Ⅲ　調査の記録

第１節　遺　　構

今回の調査では箱式石棺墓４基、甕棺墓２基が確認された（第４図）。いずれも標高５ｍより上位にある。箱式石棺墓については、棺材の抜き取りや掘り方の精査は行わず、現状保存している。

１．１号箱式石棺墓（第５図、図版２）

今回の調査の端緒となった石棺である。

蓋石は３枚１層で、幅70㎝、長さ25～60㎝ほどの板石を使用している。石棺の法量（内法で計測。以下同じ。）は、長軸１ｍ、短軸40㎝、深度43㎝を測る。主軸はＮ－84.5°－Ｗである。石棺の平面は端正な長方形状を呈する。両側壁には長さ１ｍほどの長大な１枚石を使用している。小口板は側壁端部に接する。北西端と南東端には、間隙を塞ぐための小振りの板石を使用する。使用石材はいずれも砂岩板状石である。掘り方は長軸150㎝、短軸90㎝を測る。

壺形土器（第11図４）が副葬されていたが、すでに取り上げられていたので原位置での確認はできなかった。石棺の西南端で直立した状態で出土したとのことである。棺内への流入土はほとんど認められなかった。

２．２号箱式石棺墓（第６図、図版３）

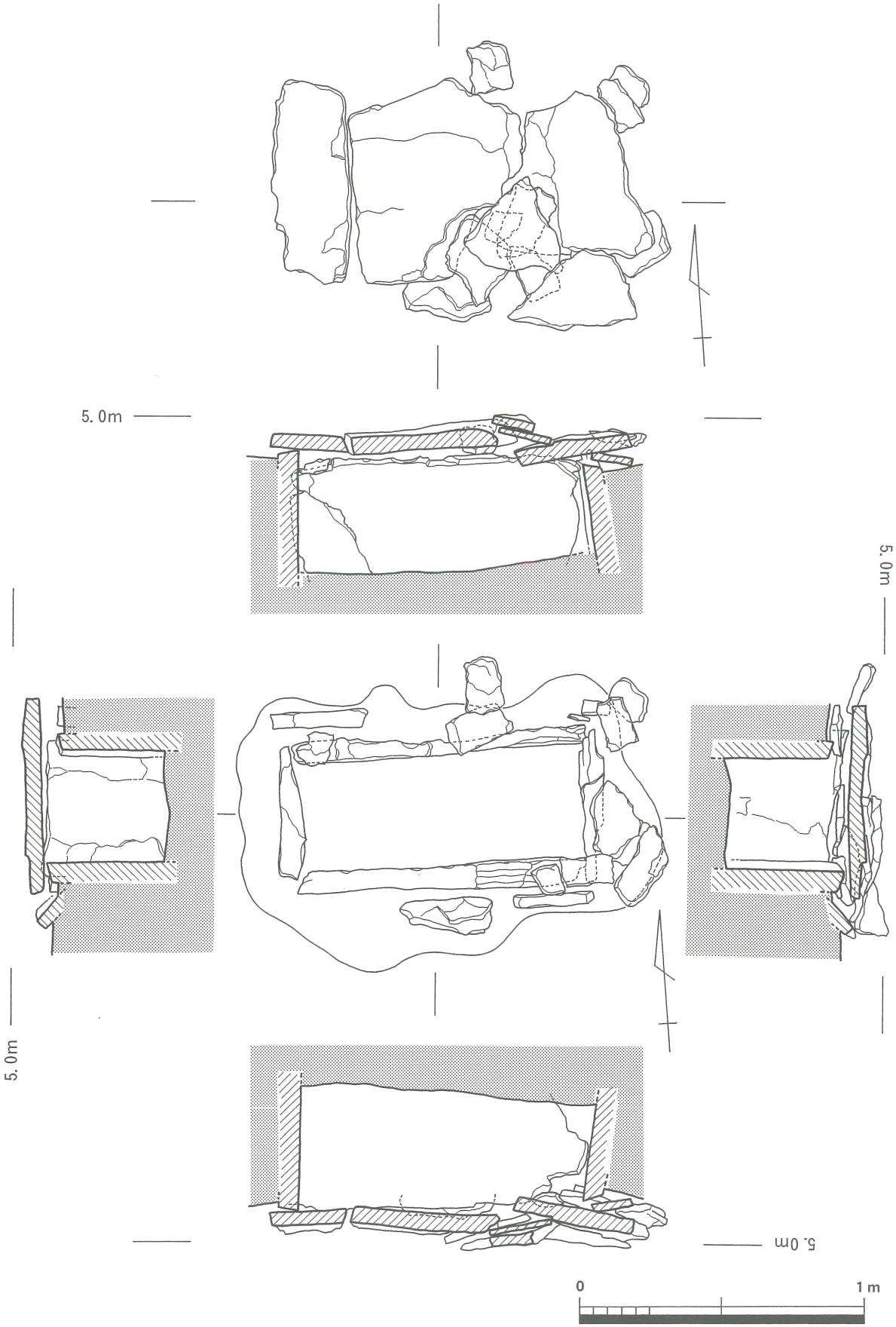
蓋石はすでに消失している。石棺の法量は長軸70㎝、短軸30㎝、深度25㎝を測る。主軸はＮ－60°－Ｗである。北側壁は１枚、南側壁は２枚の板石で構築される。北側壁が両小口に挟まれるのに対し、南側壁は東側小口板を挟んでいる。使用石材はいずれも砂岩板状石である。棺内は２次的埋土で充填されていた。

３．３号箱式石棺墓（第７図、図版３）

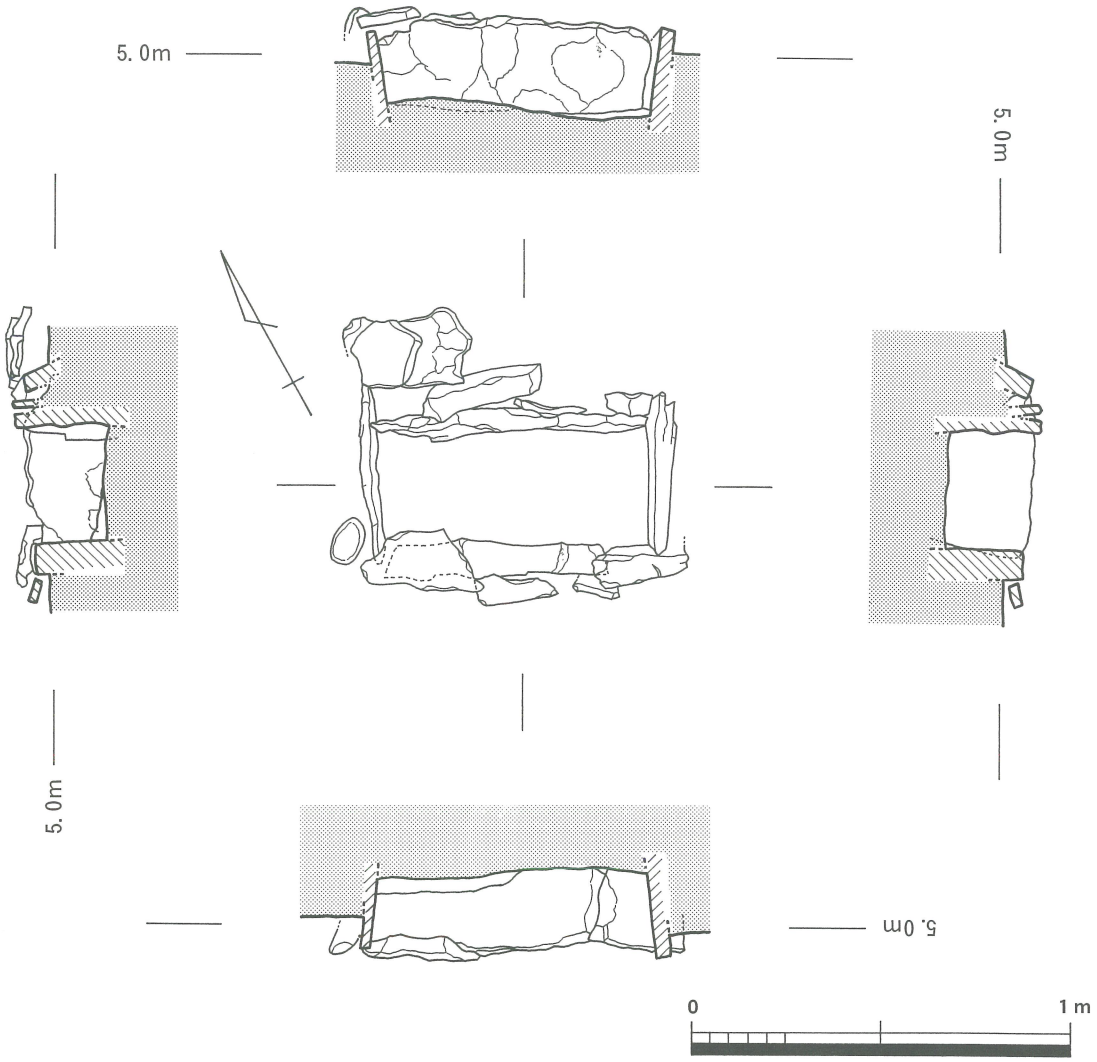
棺床面まで破壊を受けており、側壁と小口の一部がかろうじて残存している。法量は推定で長軸1.3ｍ、短軸40㎝、深度は不明。主軸はＮ－87°－Ｅである。使用石材はいずれも砂岩板状石である。

	トレンチ	法量（単位：cm）			主軸方位	副葬品	備　　考
		長さ	幅	深さ			
１号箱式石棺墓	1	100	40	43	Ｎ－84.5°－Ｗ	小壺	蓋石あり（３枚重ね）
２号箱式石棺墓	5	70	30	25	Ｎ－60°－Ｗ	なし	蓋石なし
３号箱式石棺墓	3	130＋	40＋	－	Ｎ－87°－Ｅ	なし	損壊
４号箱式石棺墓	2	110	30＋	50	Ｎ－70°－Ｗ	小壺	蓋石あり（１枚石）
１号甕棺墓	1				30°	なし	単棺・上部損壊
２号甕棺墓	2				65°	なし	合口

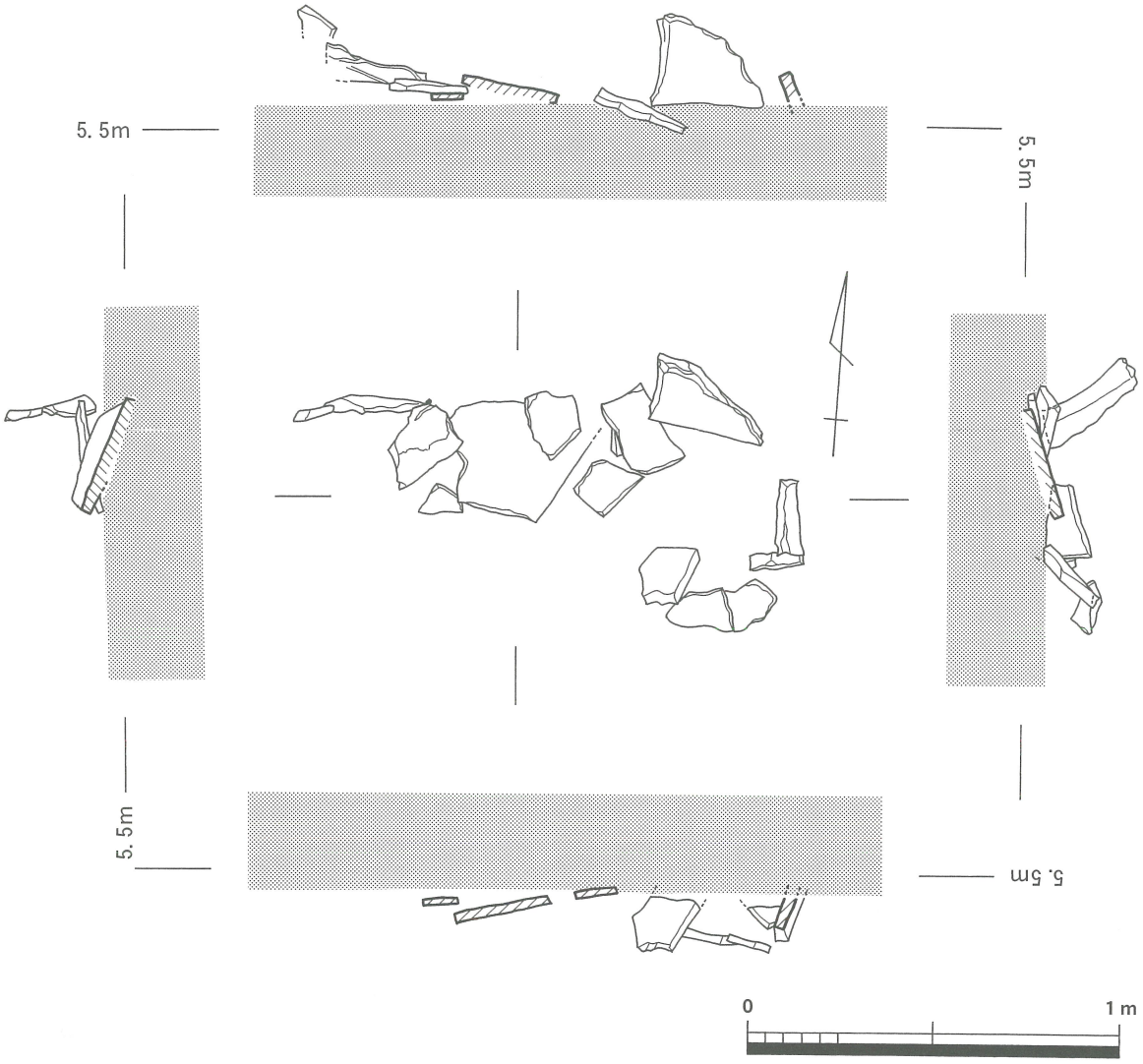
第２表　出土遺構一覧表



第５図　１号箱式石棺墓実測図（Ｓ－1/20）



第６図　２号箱式石棺墓実測図（Ｓ－1/20）



第７図　３号箱式石棺墓実測図（Ｓ－1/20）

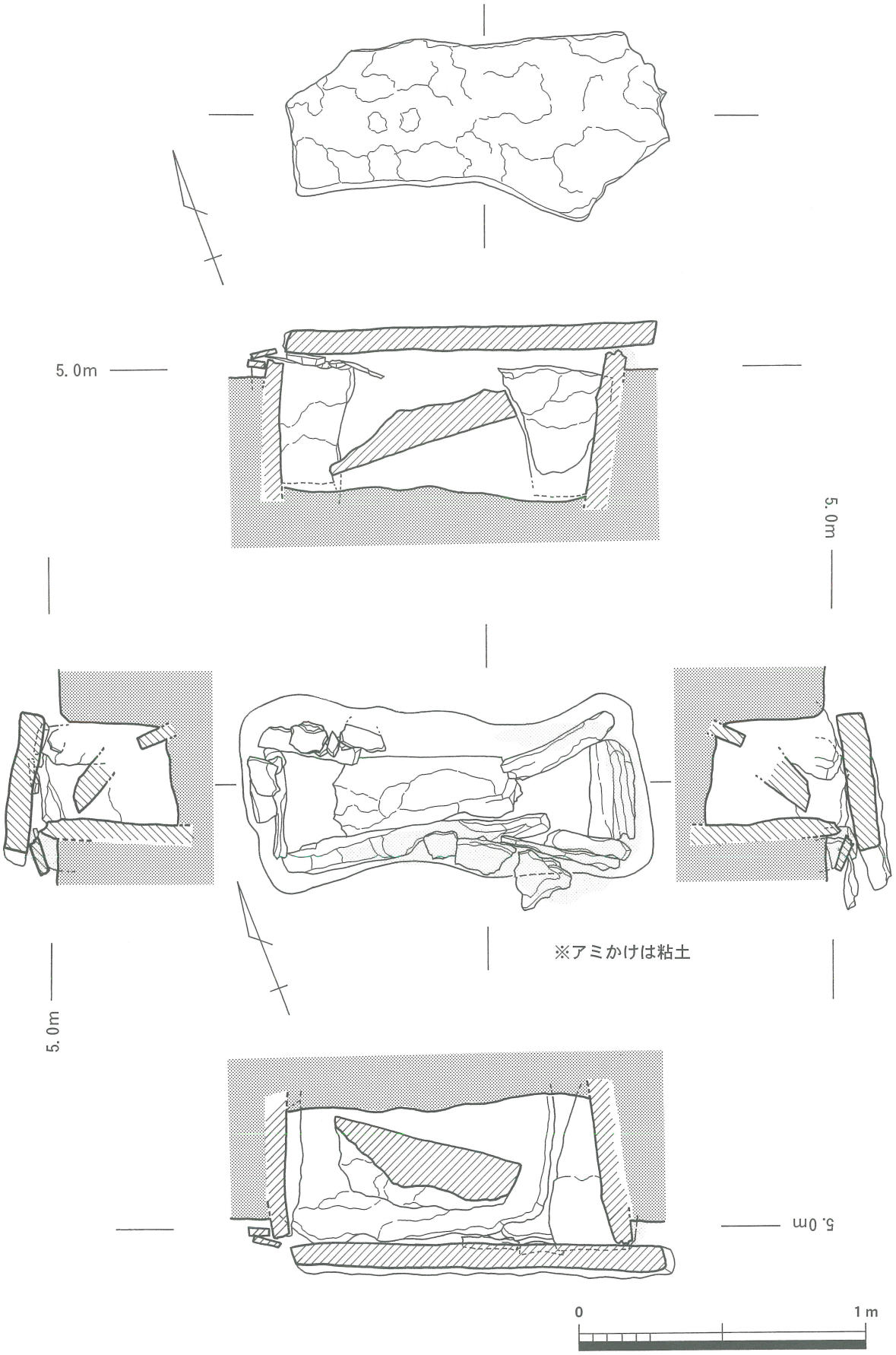
４．４号箱式石棺墓（第８図、図版４）

18年度の補足調査で確認した。１号箱式石棺墓のやや高位に位置する。17年度調査の際に石棺の蓋石であるとの認識を持っていたが、現状保存が見込まれたため、未調査であったものである。

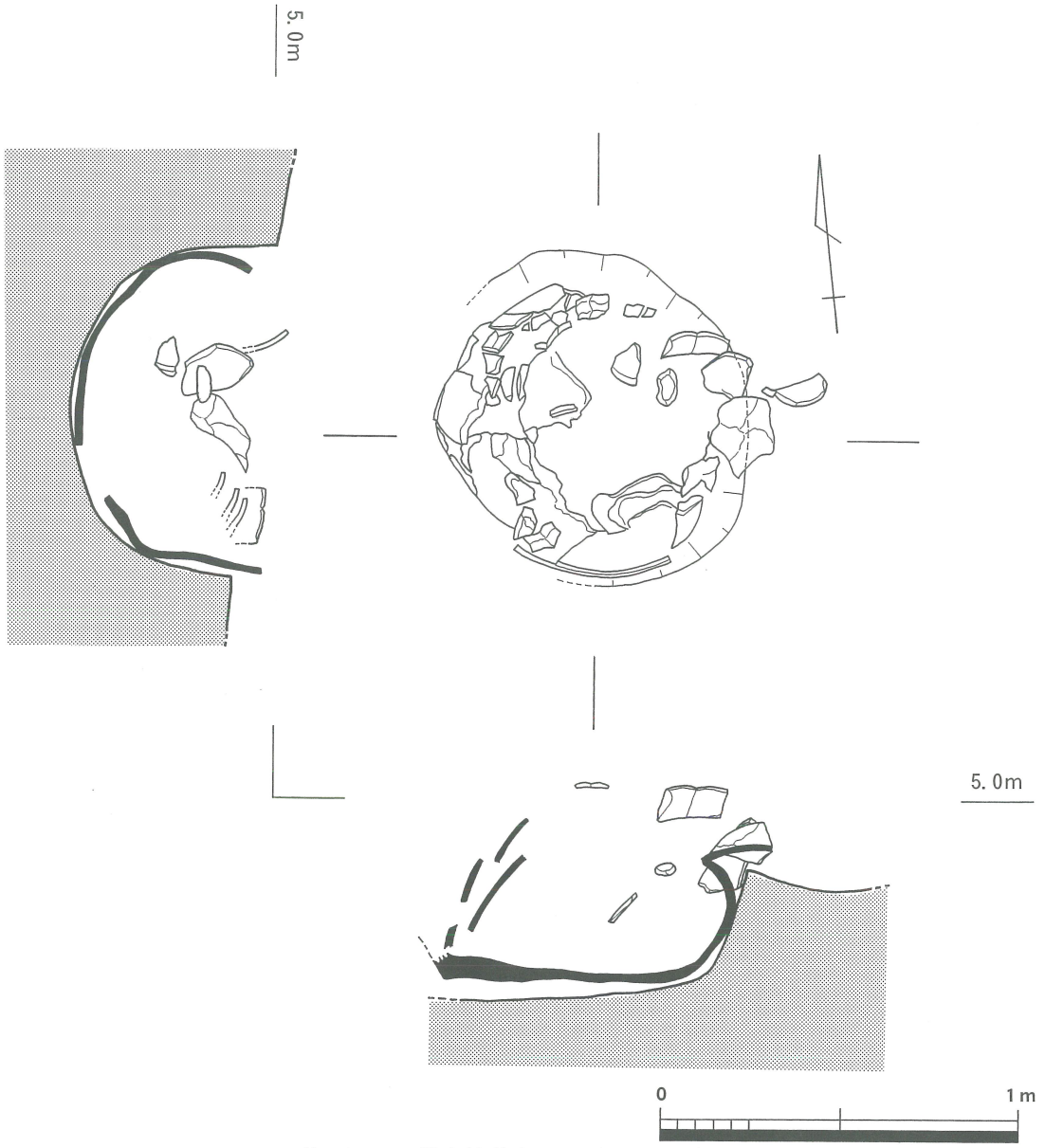
蓋石は長軸1.3m、短軸60cm（最大）、厚さ10cmの長大な一枚石である。蓋石と石棺との間には、石棺の南側と北側で粘土による目張りがなされていた。石棺の法量は、長軸1.1m、短軸30cm、深度50cmを測る。主軸はＮ－70°－Ｗである。北側壁３枚、南側壁３枚、小口板１枚で構築されている。北側壁中央の石材は内側に倒れこんでいた。平面プランは両側壁が小口板を挟む形状である。

壺形土器（第11図５）が副葬されていたが、すでに取り上げられていたので原位置での確認はできなかった。石棺の西南端で直立した状態で出土したとのことである。棺内への流入土はほとんど認められなかった。

蓋石は東側に動かされている。



第８図　４号箱式石棺墓実測図（Ｓ－1/20）

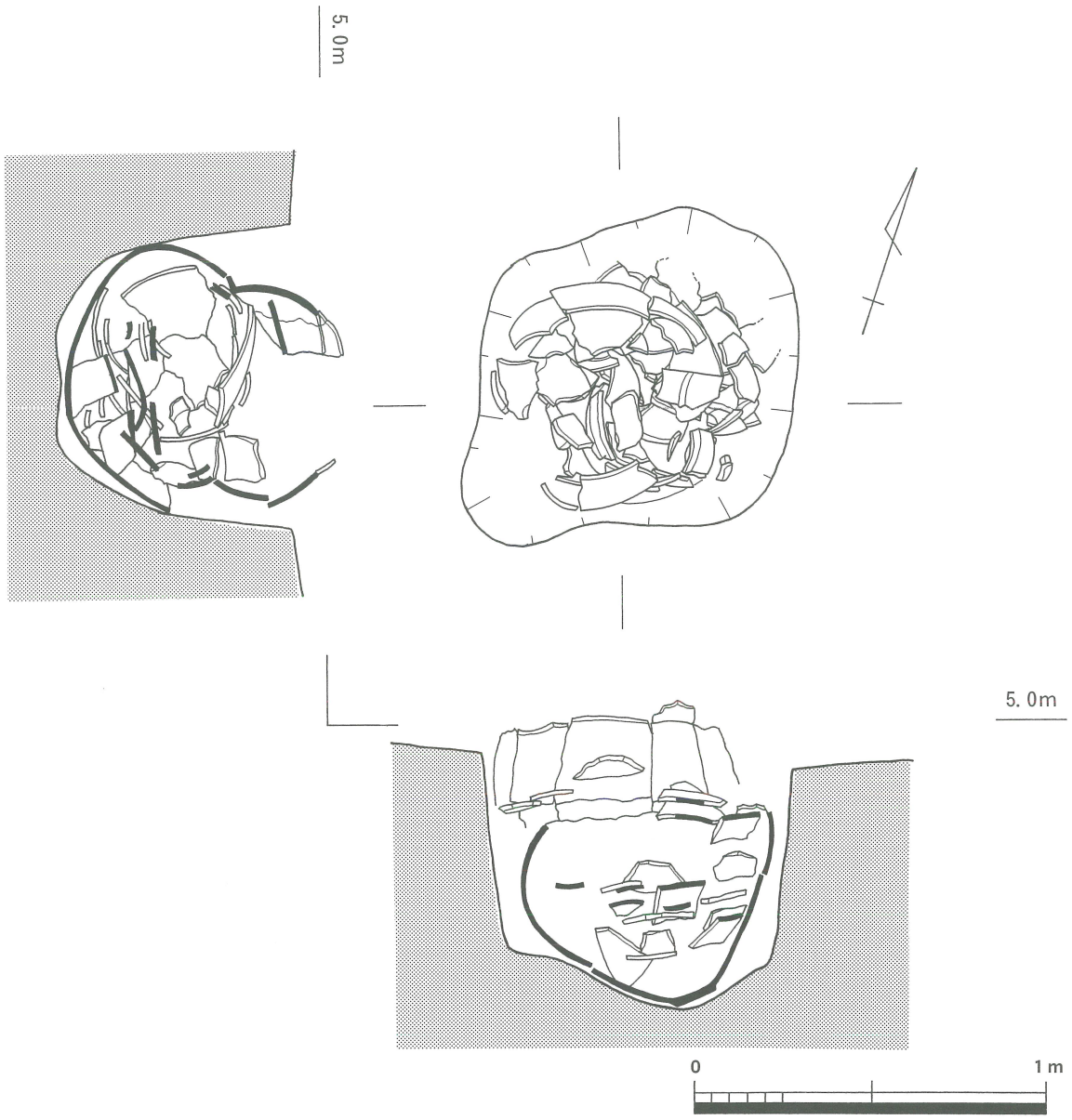


第９図　１号甕棺墓実測図（Ｓ－1/20）

５．１号甕棺墓（第９図・第11図１、図版５）

１号箱式石棺墓の東側１ｍに位置する。壺形土器を使用。土壙上部が既に削平されているが、単棺と思われる。埋置角度は約30度である。掘り方は80×90cmの楕円形で、残存高は55cmである。

非常に脆くなっており、接合に苦慮したが、復元器高45cm、口径15.7cm、最大胴部径22.6cm、底径7.6cmである。頸部に三角突帯を貼付、底部はわずかに４㎜ほどの上げ底となっている。色調は内外面ともに橙色で、底部には黒斑が見られる。胴下部に内→外への加圧による穿孔がある。調整は内外面ともにナデであるが、内面の口唇から５㎜～２cmほどのところを削っており、うすく稜が付く。弥生時代中期初頭と思われる。



第10図　２号甕棺墓実測図（Ｓ－1/20）

６．２号甕棺墓（第10図、第11図２・３、図版６）

４号箱式石棺墓の東側１ｍに位置する。上甕が甕形土器、下甕が壺形土器の合わせ口棺である。埋置角度は約65度である。掘り方は80×90㎝の楕円形で、残存高は70㎝である。

上甕は土圧により歪んでいる。器高31㎝、口径36～38.4㎝、底径は4.2㎝。寸詰まりの砲弾形で口縁部はわずかに内傾する。口縁部下に低い三角突帯を貼付、底部は１㎜ほどのわずかな上げ底である。色調は内外面ともに明黄褐色。調整は外面は器表が荒れているがハケ→ナデ、内面はナデ。口縁部内面は尖る。

下甕は壺形土器の口縁部を打ち欠いている。残存器高31㎝、胴部最大径40㎝、底径7.8㎝。底部は３㎜ほどの上げ底である。胴部には低い三角突帯を貼付する。胴下部に内→外への加圧による穿孔がある。色調は内外ともに明褐色。調整は外面は器表が荒れているが内外面ともにナデ。上甕、下甕ともに弥生時代中期前葉と思われる。

第２節　遺　　物（第11図、図版７・８）

出土した遺物の総数は28点である（第３表）。結晶片岩、黒曜石のチップ類がわずかに含まれるものの、大半は弥生土器である。石棺内の副葬土器以外の、層位で取り上げたものの大半は２Ｔの２層からの出土である。遺構の確認ができなかった、４、６～９Ｔでの出土はなかった。

トレンチ	層位	土器	剥片	結晶片岩	計
2	2層	22	3	1	26
3	2層		1		1
5	2層	1			1
1号石棺		1			1
4号石棺		1			1
計		23	4	1	28

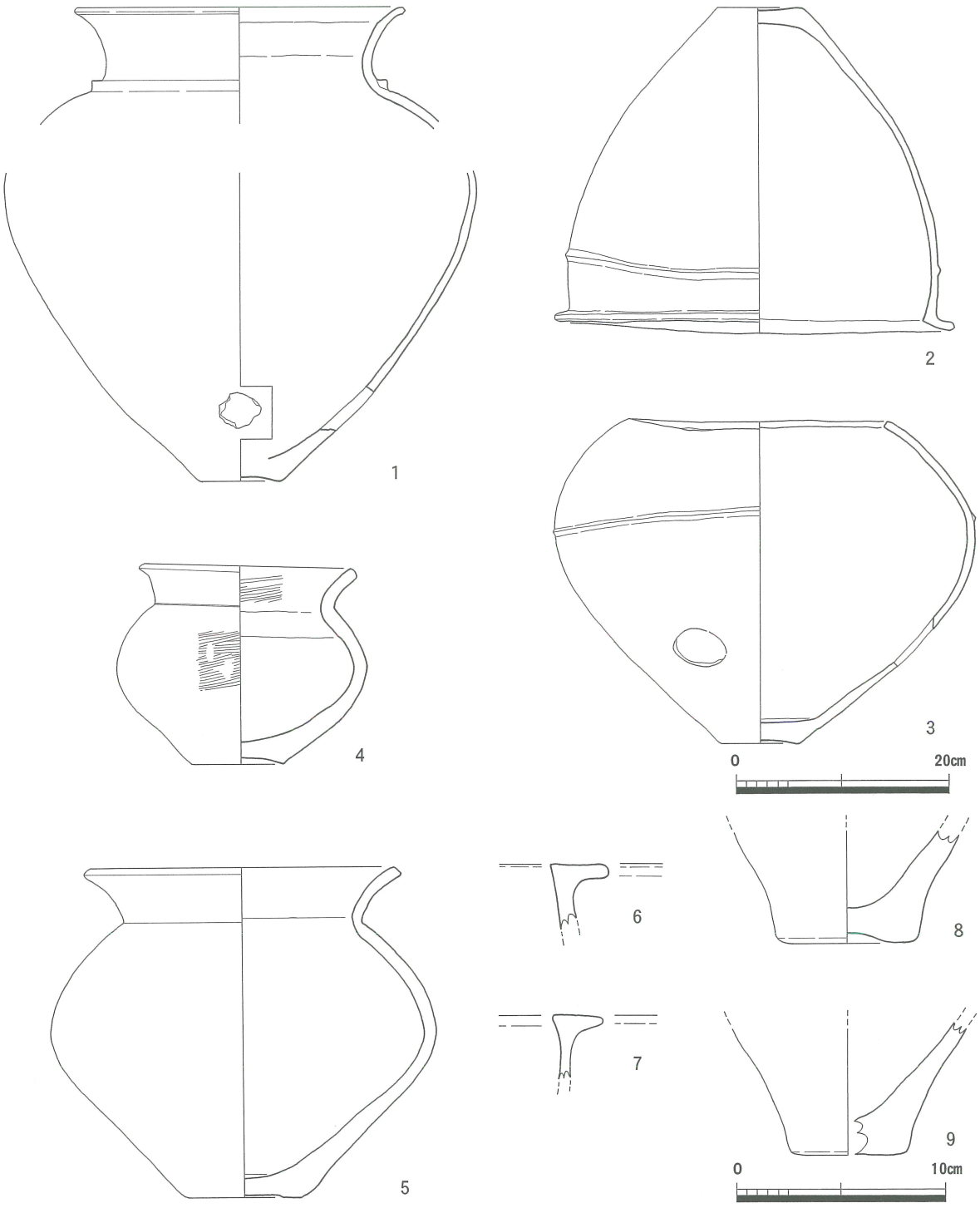
第３表　トレンチ別遺物一覧表

１は１号甕棺墓に用いられた壺形土器。２は２号甕棺墓の上甕に用いられた甕形土器、３は２号甕棺墓の下甕に用いられた壺形土器である。４は１号箱式石棺墓から出土した完形の壺形土器。広口壺で、胴部最大径はほぼ中央にある。底部は３㎜の上げ底。色調は赤褐色を呈する。胎土は精良で、焼成は堅緻である。調整は外面胴部上半ハケ→ナデ、下半ハケ→ナデか。口縁内面はハケ→ナデ、その他はナデ。頸部のつなぎ目が沈線状となる。大きさの割には重量感があり、どっしりとしている。５は４号箱式石棺墓から出土した完形の壺形土器。広口壺で、胴部最大径は中央よりやや上位にある。底部は上げ底で、畳付のような形状となっている。底部から胴部に向かってすぼまりながら膨らんでいき、頸部で大きく外反する。頸部内面には稜がつく。底部内面は凹んでいる。色調は明赤褐色を呈する。胎土は精良で、焼成は堅緻である。器面が荒れ、部分的に剥離しており、調整は不明である。４とは対照的に大きさの割りに軽い感じがする。ともに弥生時代中期初頭に位置付けられる。６、７は甕形土器の口縁部である。６は逆Ｌ字口縁で、内面には明確な稜がつく。色調は橙色。７は端部に向かって薄くおさめる。内面の稜は明瞭ではない。内面にはふくらみがあり、胴部から口縁部にかけて内湾する器形。色調は明褐色。ともに胎土は精良で、焼成も良好であり、弥生時代中期前葉と思われる。

８、９は甕形土器の底部である。８は５㎜ほどの上げ底で、立ち上がったのちに胴部へ膨らむ。９は底部から胴部へ膨らむ。ともに色調は明褐色で、胎土は精良、焼成も良好である。ともに弥生時代中期前葉と思われる。

番号	器種	部位	トレンチ	層位	法量（cm）〔　〕は復元				調整		色調	
					口径	器高	胴部径	底径	外面	内面	外面	内面
1	甕	完形（復元）	1号甕棺		〔15.7〕	〔45.0〕	〔22.6〕	〔7.6〕	ナデ	ナデ・ケズリ	橙色	橙色
2	甕	完形（復元）	2号甕棺（上甕）		〔36.0〕	〔31.0〕		〔4.2〕	ハケ→ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色
3	壺	完形（復元）	2号甕棺（下甕）			〔31.0〕	〔40.0〕	〔7.8〕	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色
4	壺	完形	1号石棺		10.5	9.5	11.9	4.4	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	赤褐色	赤褐色
5	壺	完形	4号石棺		15.2	15.7	18.4	5.4			明赤褐色	明赤褐色
6	甕	口縁部	2	2層					ナデ	ナデ	橙色	橙色
7	甕	口縁部	2	2層					ナデ	ナデ	明褐色	明褐色
8	甕	底部	2	2層				〔6.7〕	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色
9	甕	底部	2	2層				〔5.7〕	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色

第４表　出土遺物観察表



第11図　土器実測図（1～3はS－1/6、4～9はS－1/3）

Ⅳ　まとめ

一般的に、箱式石棺墓には副葬品が希薄であり、石棺が構築された時期の決定が難しいが、完形の土器を副葬する箱式石棺墓２基を確認したことは、今回の調査の大きな成果であった。いずれの土器も弥生時代中期初頭であり、これが石棺墓の構築年代と考えられる。

本遺跡近隣の箱式石棺墓としては化屋大島遺跡（註１）と貝津横島Ａ遺跡（註２）が知られている。本遺跡は、化屋大島遺跡と、大村湾奥部という立地、築造時期の点で共通するが、化屋大島遺跡が箱式石棺墓のみで構成されているのに対し、本遺跡では甕棺墓２基が確認され、同一墓域内で箱式石棺墓と甕棺墓という異なる墓制が共存することが確認されたのも大きな成果であった。貝津横島Ａ遺跡に関しては、調査例がなく、古墳時代の石棺である可能性があり、詳細については不明であるが、これも箱式石棺墓のみで構成されていると考えられる。

次に甕棺墓についてであるが、諫早市で甕棺墓が出土した遺跡としては、諫早農業高校遺跡（立石町・註３）、林ノ辻遺跡（小川町・註４）、有喜・上原遺跡（松里町・註５）、西ノ角遺跡（森山町・註６）が挙げられる。

諫早農業高校遺跡（立石町）は明治39年の校舎建設時に30基を越える甕棺墓が出土したと言われ、副葬品として銅剣が出土している。時期については不明であるが、表採資料から弥生時代中期と考えられている。林ノ辻遺跡の甕棺墓は弥生時代中期中葉～後葉で、ほかに弥生時代終末～古墳時代初頭の箱式石棺墓が確認されている。有喜・上原遺跡では弥生時代後期の甕棺墓３基、西ノ角遺跡でも同じく弥生時代後期の甕棺墓３基が確認されている。これらの遺跡では、甕棺墓が単独で築造されているか、時期差のある箱式石棺墓と共存しているという状況である。

本遺跡の調査では、箱式石棺墓が中期初頭、甕棺墓も中期初頭～前半の段階であり、異なる墓制がほぼ同時期に営まれているのが上記の遺跡に見られない特徴である。また、諫早農業高校遺跡の甕棺墓の年代は中期と考えられているが、銅剣の副葬などから中期の早い段階ではないと考えられるので、本遺跡の甕棺墓は現在のところ、市内でも古い部類に位置付けられると思われる。

一方、本遺跡が立地する大村湾沿岸の状況を見てみよう。箱式石棺墓と甕棺墓とが共存する遺跡としては、富の原遺跡（大村市・註７）、白井川遺跡（東彼杵町・註８）が挙げられる。

富の原遺跡はＡ・Ｂの２地点において、計57基の石棺と30基の甕棺が出土しており、Ａ地点が中期末～後期初頭、Ｂ地点が中期前半～後期初頭とされている。箱式石棺墓には碧玉製管玉が副葬されている。白井川遺跡は石棺墓16基、甕棺墓１基が出土、中期～後期終末で、包含層から方格規矩鏡が出土しているが、副葬品の可能性がある。これらは、①長期に渡って作られた墓域で、②石棺墓に土器以外の副葬品を持つ、という点において本遺跡との差異が認められる。甕棺墓については、これらとほぼ時期を同じくして造られたと思われる。

本遺跡は、大村湾岸において早い段階で甕棺墓という墓制を取り入れたが、ごく短期間に作

られており、副葬品についても内容に乏しい。また、遺跡周辺に後続する遺跡や高塚古墳も存在せず、弥生時代～古墳時代への発展性が見られない。このことは、富の原遺跡周辺には黄金山古墳、白井川遺跡周辺にはひさご塚古墳があり、弥生時代から古墳時代へと大きく発展する様相があるのと対照的で、これは本遺跡が生産基盤としての平地に恵まれていないことによるものと思われる。

本遺跡の石棺墓は、長軸が１ｍを越えるもの（１・３・４号）と、１ｍに満たないもの（２号）の２つに分けられる。縄文時代晩期・弥生時代早期の石棺は小型、狭小で、長軸が１ｍに満たないものがほとんどであるが、前期末～中期初頭以降になると、この傾向が変容し、長短の２極化が見られるようである。これは宮の本遺跡（註９）において、１ｍを越えるものから成人人骨が、50㎝内外のものから、小児・幼児人骨が出土しているように、被葬者の分化という機能的な違いを反映しているものと思われる（註10）。

本遺跡では今回の調査以前にも箱式石棺墓が確認されており、全体としてはかなりの規模になるものと思われる。近年、県内の箱式石棺墓の様相を、立地、構造、副葬品、甕棺墓との共伴関係といった視点でまとめられた論文（註11）があるが、今回の調査は、県内における今後の箱式石棺墓研究に新たな資料を加えることができた成果の多いものであった。しかし、墓地全体としての石棺墓と甕棺墓との共伴関係、墓域に伴う集落や住居跡については、不明な点も多く、今後の調査により本遺跡の全体像が解明されるものと考える。

註１　井上和夫　1974『化屋大島遺跡』多良見町文化財調査報告書第２集　多良見町教育委員会

註２　諫早市役所　1955『諫早市史　第１巻』

註３　正林　護　1971「諫早市出土の銅剣」『九州考古学41～44』九州考古学会

註４　秀島貞康　1983『林ノ辻遺跡』諫早市文化財調査報告書第４集　諫早市教育委員会

註５　本報告書　（121Ｐ～　）による

註６　宮﨑貴夫　1985『西ノ角遺跡』長崎県文化財調査報告書第73集　長崎県教育委員会

註７　稲富裕和ほか　1987『富の原』大村市文化財調査報告書第12集　大村市教育委員会

註８　安楽　勉ほか　1990『白井川遺跡（Ⅱ）』東彼杵町文化財調査報告書第４集　東彼杵町教育委員会

註９　久村貞男　1980『宮の本遺跡』佐世保市埋蔵文化財調査報告書　佐世保市教育委員会

註10　秀島貞康ほか　2006『風観岳支石墓群』諫早市文化財調査報告書第19集　諫早市教育委員会

註11　寺田正剛　2005「長崎県地域における箱式石棺墓の様相について」『西海考古６号』西海考古同人会

【参考文献】

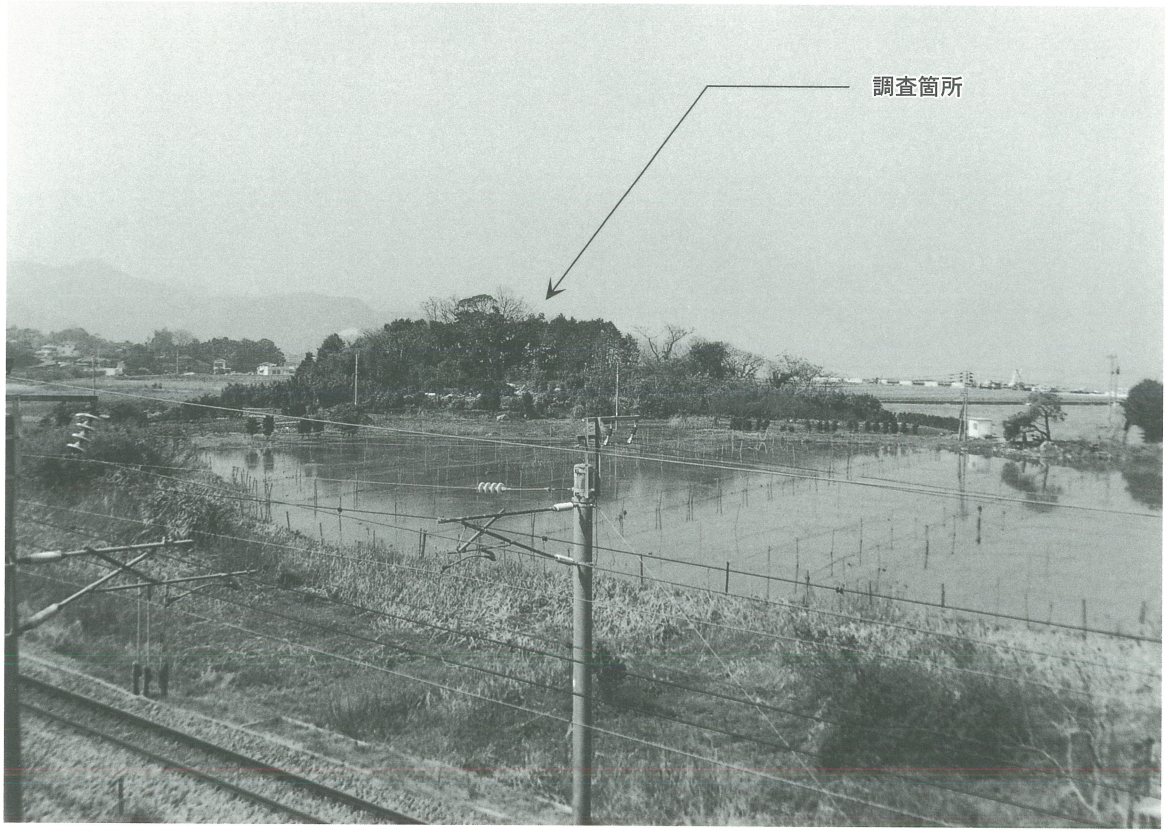
七田忠昭ほか　1979『二塚山』佐賀県教育委員会

本田秀樹ほか　2000『長畑馬場遺跡』大島村文化財調査報告書第13集　大島村教育委員会

福田一志ほか　2005『原ノ辻遺跡　総集編Ⅰ』原ノ辻遺跡調査事務所調査報告書第30集　長崎県教育委員会

川道　寛ほか　2006『麻生瀬遺跡』川棚町文化財調査報告書第１集　川棚町教育委員会

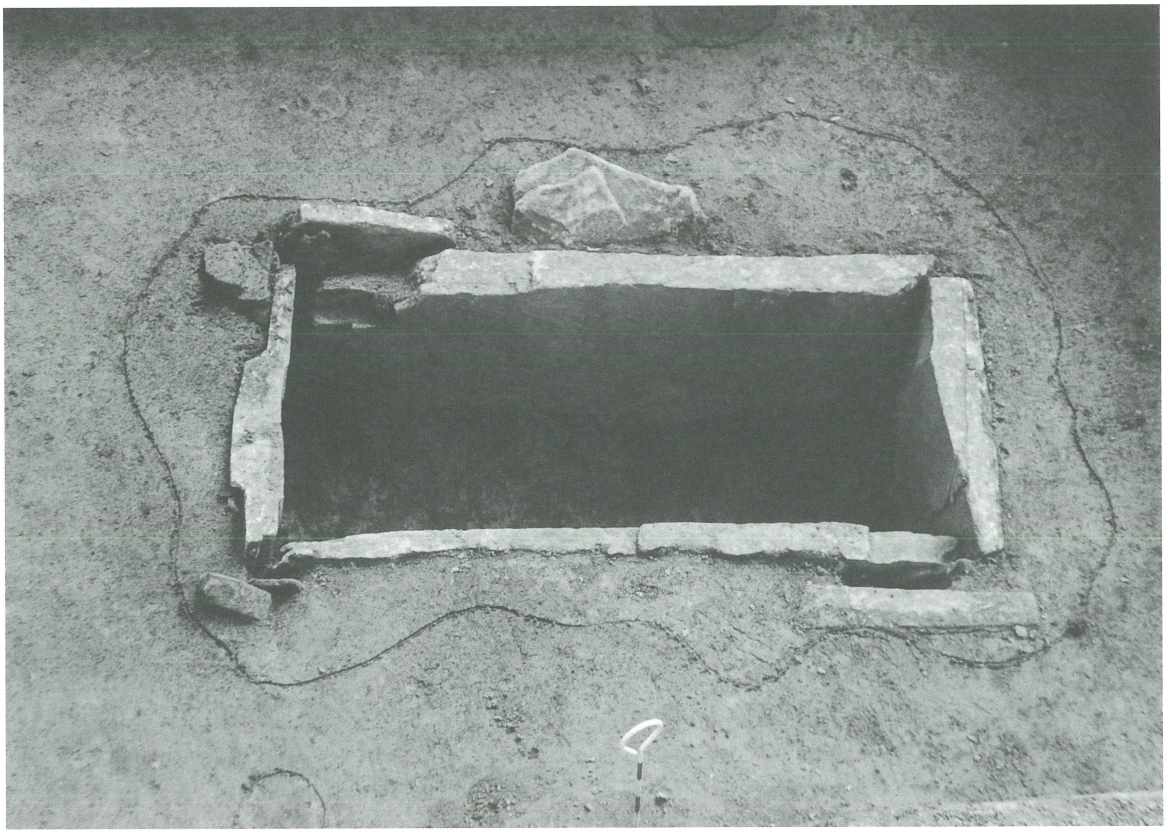
図　　版



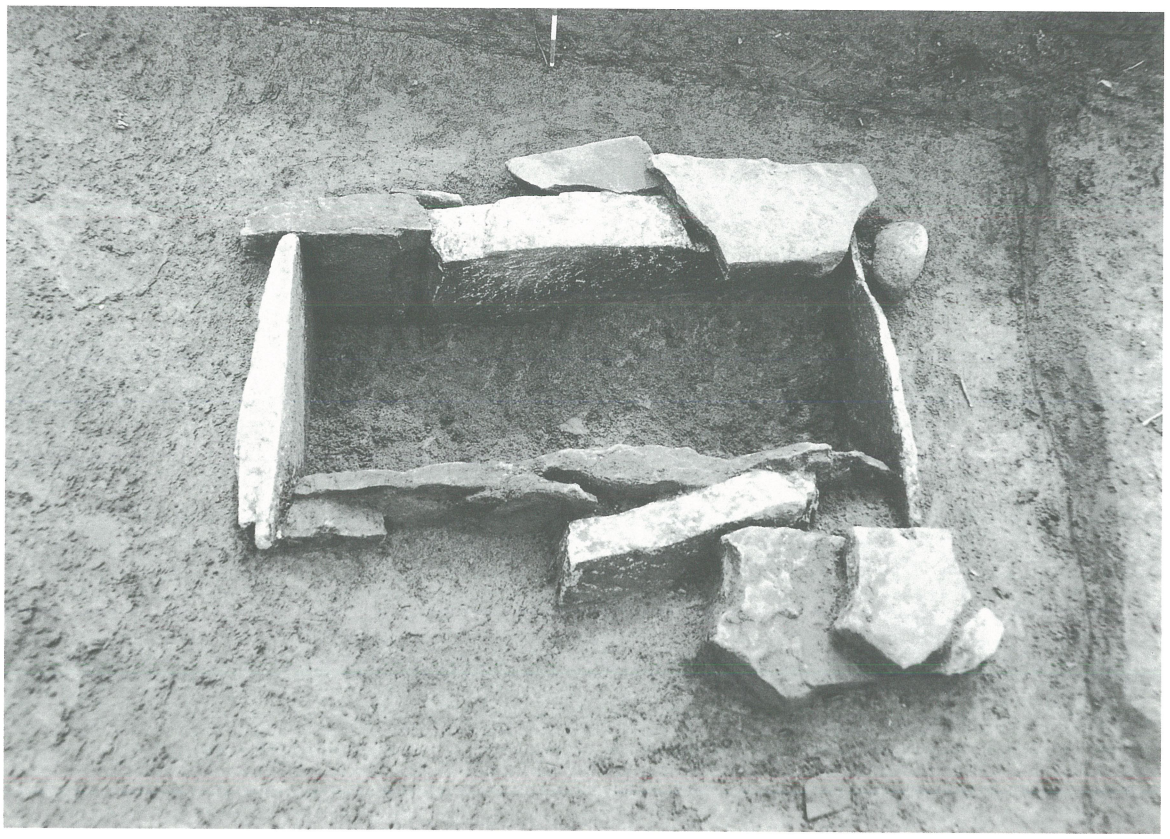
遺跡遠景（手前はＪＲ長崎本線）

遺跡近景

1号箱式石棺墓（蓋石）

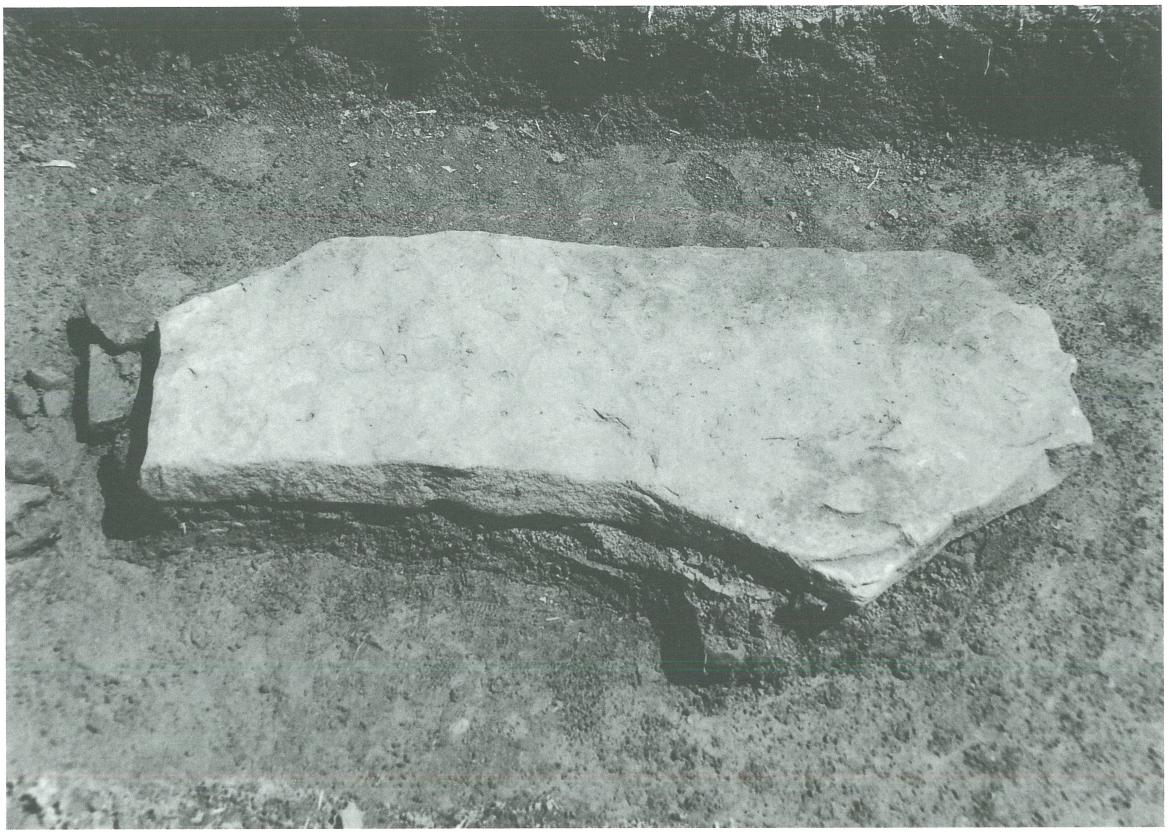


同　　上（内部主体）



2 号箱式石棺墓

3 号箱式石棺墓



4号箱式石棺墓（蓋石）

同　　上（内部主体）

1号甕棺墓

同　　上

2号甕棺墓

同　　上

出土遺物①